

# 大正時代における奈良女子高等師範学校の音楽教員養成 — 選修音楽科に注目して —

坂本 麻実子

## Training Music Teachers in Nara Women's Higher Normal School of Taisho Period

— from A Viewpoint of Optional Music Course —

SAKAMOTO Mamiko

E-mail: msakamot@edu.u-toyama.ac.jp

**キーワード**：奈良女子高等師範学校，音楽教員，教員養成，音楽教育，女子教育

**keywords**：Nara Women's Higher Normal School, Music Teacher, Training Teachers, Music Education, Education of Women

### 1. 女子高等師範学校の音楽教員養成機能

明治41年（1908）創立の奈良女子高等師範学校（以下，奈良女高師と略す。奈良女子大学の前身）は，明治23年（1890）創立の東京女子高等師範学校（以下，東京女高師と略す。お茶の水女子大学の前身）と並び旧学制下の女性中等教員の養成を担った。ただし女子教育では必修である音楽の教員は東京音楽学校1校のみで養成していたので，音楽教員は慢性的に不足しており，音楽以外の教員が免許外の音楽を兼担するのは珍しくなかった<sup>(1)</sup>。しかし，女子師範学校や高等女学校で音楽教育を受け女子高等師範学校に入学した生徒の中にはさらに音楽を学び，音楽科教員免許の取得を希望する者がいても不思議ではないだろう。実際，東京女高師でも奈良女高師でも一部の生徒に音楽科教員免許を出していたのである（坂本 2006）。

ところで奈良女高師には「お茶の水に負けないように！」（奈良女子大学 1970：33）という校風があり，音楽科教員免許を出すにも独自の教員教育を実施した。開校当時，奈良女高師は東京女高師とは異なり，男子の高等師範学校に倣って予科（4カ月）と本科（3年8カ月）があり，本科は4部（国語漢文部，地理歴史部，数物化学部，博物家事部）で構成されていた。さらに明治42年（1909）9月には本科4部を対象に「選修科」（図画，音楽，裁縫，園芸，翌年9月より習字を追加）を開設して1科目

を選択させ，中等学校で教えらるるレベルの専門教育を行った。その選修科の中で筆者は「選修音楽科」に注目したい。ちなみに，東京女高師には音楽に特化した学科はなかった。近畿地区では私立のミッションスクールにアメリカ女性宣教師が指導する音楽専門コースがあった。神戸女学院は明治39年（1906）に音楽科を設置し（神戸女学院 2000：96），同志社女学校は明治37年（1904）には有志の者にピアノやオルガンを教える「音楽撰科」を作った（同志社女子大学 2000：76）。一方，官立の奈良女高師では近畿地区では唯一音楽科教員免許を取得できる選修音楽科を開設し，当初は東京音楽学校の教師を招聘し，特別授業や演奏会を行って充実を図った<sup>(2)</sup>。しかし大正3年（1914）に奈良女高師は学科改正により東京女高師と共通の文科，理科，家事科の3学科（4年制）に再編し，それに伴って選修科を廃止した。昭和戦後期になると，神戸女学院と同志社女学校は女子大学となって音楽科を設置した。東京と奈良の両女高師も女子大学となり，お茶の水女子大学は音楽科を新設したが（お茶の水女子大学 1984：321），奈良女子大学に音楽科の復活はなかった。したがって奈良女子大学で音楽科教員免許を取得した者は，女高師時代，大正2年以前に入学して選修音楽科を修了し，同6年以前に卒業した1回生から5回生までに限られる。

奈良女高師の音楽教員養成は短命に終わった。そのためか奈良女高師の選修音楽科に対する音楽史・

音楽教育史研究の関心はごく一部に止まる（平井1995）。しかしながら、奈良女高師が選修音楽科を立ち上げ、一時期であれ教員養成に取り組んだという史実は検討に値するのではないだろうか。そこで、選修音楽科の教育内容と生徒数、生徒の実技力、卒業生の音楽教育へのかかわりを調査して実態を明らかにし、さらには選修音楽科廃止後の音楽教育の状況も視野にいれながら、奈良女高師の音楽教員養成の特性や問題点について考察する。

## 2. 必修音楽と選修音楽

奈良女高師では音楽は予科、本科ともに必修であった。ただし明治30年（1899）制定の「女子高等師範学校規程」は音楽を教科目としながらも「音楽ハ学習困難ナリト認メタル生徒ニハ之ヲ課セザルコトアルベシ」として音楽の免除を認めたので、奈良女高師でもその旨の規則は存在した（「奈良女子高等師

表1. 奈良女子高等師範学校の音楽の授業時間数の変遷

①明治43年（1910）

学年	予科	本 科			
		1 年	2 年	3 年	4 年 (2学期まで)
時間	2	必修音楽1 選修音楽8	必修音楽1 選修音楽8	必修音楽1 選修音楽8	必修音楽1 選修音楽3

②大正元年（1912）

学年	予科	本 科			
		1 年	2 年	3 年	4 年 (2学期まで)
時間	2	必修音楽1 選修音楽8	必修音楽1 選修音楽8	必修音楽1 選修音楽8	必修音楽2 選修音楽3

③大正3年（1914）

学年	1 年	2 年	3 年	4 年 (1学期)	4 年 (2学期)
時間	必修音楽2	必修音楽2	必修音楽1	必修音楽1	必修音楽2

④大正5年（1916）

学年	1 年	2 年	3 年	4 年
時間	必修音楽2	0	0	0

⑤大正10年（1921）

学年	1 年	2 年	3 年	4 年 (2学期まで)
時間	随意音楽1	随意音楽1	随意音楽1	随意音楽1

備考：「奈良女子高等師範学校一覧」明治43年度、大正元年度、大正3年度、大正5年度、大正10年度より作成。

範学校規則」第7条）。『奈良女子高等師範学校概覧』（奈良女子高等師範学校1914）によれば、必修音楽は「音楽ノ趣味ヲ養ヒ、以テ徳性ノ涵養ニ資スル」ことが目的であり、クラス授業で唱歌を学び楽器練習（オルガン）は任意であった。必修音楽の授業時間は、予科では週2時間、本科では1, 2, 3年が週1時間、4年（2学期まで、3学期は教育実習とする）が週1時間であった（表1-①）。大正元年（1912）には4年（2学期まで）は週2時間になった（表1-②）。必修に対して選修の音楽は「中等学校ニ於テ音楽教師タルコトヲ得シメン」ことが目的であり、個人レッスンによる唱歌と楽器練習（オルガンを主とするが優秀な生徒にはピアノを課す）に重点を置く。実技レッスン以外の科目には音楽理論、和声学、音楽史、音楽教授法があった。唱歌は基本練習では「コールユーブンゲン Chorübungen」を使用するが、それ以外は教材を決めず諸歌集から選曲する<sup>(3)</sup>。オルガン教材には島崎赤太郎「オルガン教則本」全2巻、「小学唱歌集四重音」、「ベンダー」全3巻、「レーメンズ」等を使用し<sup>(4)</sup>、ピアノ教材には「チェルニー（練習曲）」、「ソナチネアルバム」、「ソナタアルバム」等を使用する。選修音楽の授業時間は1, 2, 3年が週8時間、4年（2学期まで）が週3時間である（表1-①）。そして年2回の演奏会を行う。

選修音楽科が最後の卒業生を出す大正6年までの奈良女高師の音楽教員は東京音楽学校出身者で占められ、田中寅之助（明治40年甲種師範科卒、明治42年4月～大正3年8月在職）、宮内薫（明治43年甲種師範科卒、明治43年4月～大正3年9月在職）、幾尾純（明治43年本科声楽部卒、明治44年4月着任）、青木信忠（大正2年甲種師範科卒、大正2年4月～大正3年5月在職）、西村甫也（明治38年甲種師範科卒、大正3年10月着任）、渡辺銈（大正4年本科声楽部卒、大正4年5月～大正5年5月授業囑託）が指導した。そして選修音楽科には本科4部から生徒が集まった。表2は選修音楽科を修了し音楽科教員免許を取得した生徒の一覧表である。1回生5名（大正2年3月卒）、2回生4名（大正3年3月卒）、3回生4名（大正4年3月卒3名、同年7月卒1名）、4回生6名（大正5年3月卒）、5回生3名（大正6年卒）、合計22名を数える。なお、22名中4名が大阪の清水谷高女出身であるが、同校は永井幸次（東京音楽学校明治29年

表 2. 奈良女子高等師範学校選修音楽科卒業生一覧

卒業年月・本科		氏名〔 〕内は改姓	出身校	免許取得科目
1 回 生	T 2.3 国漢	松居静江	大垣高女	修, 教, 国漢, 体, 音
	T 2.3 国漢	今里エタ〔小野田〕	鹿児島県師	修, 国漢, 体, 音
	T 2.3 地歴	原谷きよ〔鈴木〕	石川県高女	修, 教, 地歴, 体, 音
	T 2.3 数化	田中ムメノ	広島高女	修, 教, 数(算, 代, 幾, 三), 体, 音, 理(物, 化)
	T 2.3 博家	吉田絹〔林〕	清水谷高女	修, 教, 家, 体, 音, 博, 理(博)
2 回 生	T 3.3 国漢	田代愛〔竹崎〕	兵庫県高女	修, 教, 国漢, 音, 体
	T 3.3 国漢	荒井八重〔泉〕	奈良県師	修, 教, 国漢, 体, 音
	T 3.3 地歴	華岡文子	清水谷高女	修, 教, 地歴, 音
	T 3.3 博家	菅沼喜美子〔原谷〕	大阪府師	修, 教, 家, 音, 体, 博, 理(博)
3 回 生	T 4.3 国漢	林エイ〔名越〕	栃木県師	修, 教, 国漢, 音
	T 4.3 国漢	佐脇千代〔清水〕	私立山中高女	修, 教, 国漢, 音
	T 4.3 地歴	白瀬ふみこ〔市川〕	宮城県師	修, 教, 地歴, 体, 音
	T 4.7 地歴	末弘杉枝	東京府立一女	修, 教, 地歴, 音
4 回 生	T 5.3 国漢	立澤ハツセ〔小泉〕	熊本県師	修, 教, 国漢, 音, 体
	T 5.3 国漢	宇多川松代	神奈川県高女	修, 国漢, 体, 音
	T 5.3 国漢	古池さく〔本田〕	梅田高女	修, 教, 国漢, 体, 音
	T 5.3 数化	中村美壽能	東京府師	修, 教, 数(算, 代, 幾), 物化, 理(物, 化), 体, 音
	T 5.3 博家	山科鐵枝〔福田〕	清水谷高女	修, 博, 理(博), 家, 体, 音
	T 5.3 博家	山本勝〔廣井〕	清水谷高女	修, 教, 博, 理(博), 家, 体, 音
5 回 生	T 6.3 国漢	谷すゞ子〔長谷川〕	大垣高女	修, 国, 体, 音
	T 6.3 数化	澁谷シノ〔重松〕	高知県高女	修, 数(算, 代, 幾, 三), 物化, 理(物, 化), 体, 音
	T 6.3 博家	糸永キヨ〔手島〕	大分県師	修, 教, 博, 理(博), 家, 体, 音

備考：『奈良女子高等師範学校一覧』、国立公文書館所蔵『教員免許台帳（師範学校中学校高等女学校・免許）7の1・大正4年度』、『同7の2・大正13年度』より作成。学科の略記は次のとおり。国漢（国語漢文部）、地歴（地理歴史部）、数化（数物化学部）、博家（博物家事部）。担当科目の略記は次のとおり。修（修身）、教（教育）、国漢（国語及び漢文）、体（体操）、音（音楽）、地歴（地理及び歴史）、数（数学）、算（算術）、代（代数）、幾（幾何）、三（三角法）、博（博物）、物化（物理及び化学）、理（理科の内物理、化学）、理（理科の内博物）、家（家事）、博（博物）。

専修部卒で明治39年から昭和6年まで在職。大阪音楽大学の前身である大阪音楽学校の創設者）という名物教師の影響で音楽に熱心な生徒が多かったという（大阪府立清水谷高等学校 2001：32-33）。

### 3. 演奏会にみる実技教育の成果

さて選修音楽科はどの程度の教育成果を上げたのか。表3は選修音楽科生が出演した演奏会の事例であり、演奏曲から生徒の実技レベルを推測してみよう。

1回生の中では田中ムメノの出演が目立つ。2年ではオルガンで「ガボット」と「スタディー」（教材曲の類いか）を弾いていたが（表3-①）、3年ではピアノに進み同級の吉岡美津<sup>(5)</sup>との連弾でチェルニー作曲「ウィンナマーチ」を演奏し（表3-②）、4年ではピアノを独奏した（演奏曲は不明。表3-

④）。卒業後、田中は研究科に進学する一方で附属高女の嘱託教員（担当は理科と音楽）となり、研究科修了時にはメンデルスゾーン作曲「（3つの）幻想曲あるいはカプリス」（表3-⑤）、クーラウ作曲「ソナチネ」を演奏した（表3-⑥）。一般向けの通俗音楽会で弾いたソナチネはともかく、「（3つの）幻想曲あるいはカプリス」は明治末期ならば東京音楽学校のピアノ専攻生が演奏会で弾いたような曲目である<sup>(6)</sup>。2回生のうち、田代愛のオルガンは2年での演奏曲は不明だが（表3-③）、4年ではバッハ作曲「小プレリュードとフーガ」であった（表3-⑤）。バッハはオルガンの必須レパートリーであり、「小プレリュードとフーガ」は東京音楽学校の生徒も演奏していた<sup>(7)</sup>。田代と同期の荒井八重は4年で「友の別れ」を独唱し（表3-⑤）、卒業時には教員の宮内薫との二重唱でメンデルスゾーン作曲「秋の歌」を恐らくは原語（ドイツ語）で歌った（表

表 3. 奈良女子高等師範学校音楽会における選修音楽科生徒の演奏曲

①明治43年（1910）2月11日校友会発会式
田中ムメノ（O） ガボット，スタディー
②明治43年（1910）5月28日第2回皇后陛下御誕辰祝賀会
田中ムメノ，吉岡美津（P 連弾） [チェルニー]：ウィンナマーチ
③明治44年（1911）5月1日学芸会
田代愛（O） 演奏曲不明
④明治45年（1912）5月1日学芸会
菅沼喜美子（O） 演奏曲不明
田中ムメノ（P） 演奏曲不明
⑤大正3年（1914）2月11日紀元節校友会発会式
田代愛（O） バッハ：クライネプレリュードウントフーゲ [小プレリュードとフーガ Kleine Präludien und Fugen BWV. 553～560の1曲か]
荒井八重（V） 友の別れ [作曲者不明]
田中ムメノ（P） メンデルスゾーン：ファンタジーオウカプリース [3 Fantasies ou caprices op. 16の1曲か]
⑥大正3年（1914）3月31日校舎落成記念通俗音楽会
田中ムメノ（P） クーラウ：ソナチネ
宮内薫（教員），荒井八重（二重唱） メンデルスゾーン：ルブストリート [秋の歌 Herbstlied op. 63-4]
⑦大正4年11月20日（1915）附属学校との連合音楽会
原谷とよ（O） ロオレイ，ソナチネ抜粋
山本勝（P） クーラウ：ソナチネ
糸永キヨ（O） バッハ：フーガ，モーツァルト：ドン・ファン
中村美壽能（V） ロッシーニ：ゼミラミス [セミラーミデ Semiramide]
小林（V1，名前の記載なし），山科鐵枝（P） シモネッティ：マドリガル
谷すゞ子（O） バッハ：ガボット，シューマン：リード
宇田川松代（V） [ヘンデル]：覚醒 [原曲 Ombra mai fu，内藤水笛訳詞]
澁谷シノ（P） モーツァルト：ソナタ
山本勝，古池さく（二重唱） モーツァルト：フィガロの結婚
立澤ハツセ（O） レーメンス：ファンファーレ
山科鐵枝（V） ロッシーニ：バルビーア [セビリアの理髪師 Il barbiere di Sevilla]
中村美壽能（V） ドゥセック：ソナチネ

備考：平井（1995）より作成。P はピアノ，V は声楽，O はオルガン，V1 はヴァイオリンを示す。  
[ ] 内は執筆者による補足。

3-⑥)。

大正4年（1915）11月20日の附属学校との連合音楽会（表3-⑦）は大規模な音楽会で，5回生（当時3年）では原谷とよ<sup>(8)</sup>，糸永キヨ，澁谷シノがオルガンを演奏し，4回生（当時4年）は山本勝（ピアノ，声楽），中村美壽能（声楽，ピアノ），山本鐵枝（ピアノ伴奏，声楽），宇田川松代（声楽），古池はつ（声楽），立澤ハツセ（オルガン）が出演した。この演奏会は「本科選修生の演奏は往々専門家に辱らざるものあり。一般に了解さるべき声楽の中，ゼミラミス，覚醒，フィガロ，バルビーア，等は特筆すべきものなり」（平井1995：226）と評された。ピアノはソナチネアルバムまたはソナタアルバムのレベルの演奏となり，声楽ではオペラのアリアを歌

う生徒が出てきた。中村美壽能によるロッシーニ作曲「ゼミラミス（セミラーミデ）」の独唱とは「私はバビロニアで見た Eccomi al fine in Babilonia」であろうか。宇田川松代の独唱「覚醒」はヘンデル作曲「セルセ」の中のアリア「オンブラ・マイ・フ（ラルゴ）」の訳詞曲である（注3参照）。山本勝と古池さくによるモーツァルト作曲「フィガロの結婚」の二重唱とは「そよ風に Che soave zeffiretto」，山本鐵枝の「バルビーア（セビリアの理髪師）」の独唱とは「今の歌声は Una voce poco」と推測される<sup>(9)</sup>。「覚醒」以外は原語（イタリア語）歌唱であろう。

選修音楽科では必修音楽の週1時間に対して週8時間も当てて音楽学校並みのレッスンを行った結



果、生徒の演奏は年々レベルを上げていったことがわかる。

#### 4. 音楽はプラスアルファの免許科目

それでは選修音楽科の卒業生は実際に教育現場で音楽を担当したのだろうか。試みに大正10年代について、『中等教育諸学校職員録』（中等教科書協会）のうち国立国会図書館がデジタル化して公開している大正10年（1921）版，同11年（1922）版，同15年（1926）版に基づき，選修音楽科卒業生の勤務校と担当科目を表4にまとめた。当時，選修音楽科卒業生の中にはすでに教職を離れた者もいるが，大正10年度，11年度，15年度のうち1回以上音楽を担当した者は次のとおりである。1回生では松居静

江，2回生では田代愛と荒井八重，3回生では佐脇千代と白瀬ふみこ，4回生では中村美壽能，5回生では糸永キヨ，以上7名は本科での専攻科目に加えて音楽を担当していた。一方，1回生の今里エタと田中ムメノ，2回生の華岡文子と菅沼喜美子，3回生の林エイ，5回生の谷すゞ子，以上6名は本科での専攻科目だけを担当していた。

表4を見ると，選修音楽科の卒業生は音楽を担当しないわけではないが，音楽教育に積極的にかかわったとは言えない。1回生の松居静江は国語に加えて音楽を継続的に担当していたが、『中等教育諸学校職員録』によれば大邱公立高女には音楽専門の教員がいなかったからである。1回生の田中ムメノはピアノの腕をもつが，勤務先の鹿児島県立第一高女には東京音楽学校出身の音楽教員<sup>(10)</sup>がいるので，

表4. 選修音楽科卒業生の勤務校と受持科目（大正10年，11年，15年）

卒業年月・本科 氏名〔〕内は改姓		勤務校，（）内は受持科目		
		大正10年	大正11年	大正15年
1 回 生	T 2.3 国漢 松居静江	朝鮮大邱公立高女 (音, 国)	→ →	→ (音, 国, 作)
	T 2.3 国漢 今里エタ〔小野田〕	鹿児島県女師兼県立第二高女 (国, 作)	→ →	→ (記載なし)
	T 2.3 数化 田中ムメノ	鹿児島県立第一高女 (数, 理)	→ →	→ →
2 回 生	T 3.3 国漢 田代愛〔竹崎〕	清水谷高女 (国, 音)	→ →	→ (国)
	T 3.3 国漢 荒井八重〔泉〕	京都府立第二高女 (国, 音)	奈良女高師附属高女 (国, 作)	死亡*
	T 3.3 地歴 華岡文子	私立楠蔭高女 (歴, 修)	→ →	大阪市立堀江幼稚園*
	T 3.3 博家 菅沼喜美子〔原谷〕	大阪府女師 (博, 家)	→ →	→ (博)
3 回 生	T 4.3 国漢 林エイ〔名越〕	宮城県女師 (修, 国, 漢, 習)	→ (修, 国, 漢, 歴, 習)	なし
	T 4.3 国漢 佐脇千代〔清水〕	梅田高女 (国, 音, 作)	→ (国)	なし
	T 4.3 地歴 白瀬ふみこ〔市川〕	なし	朝鮮平壤女子高等普通学校 (音, 地, 歴)	なし
4 回 生	T 5.3 数化 中村美壽能	駿東高女 (数, 音)	なし	死亡*
5 回 生	T 6.3 国漢 谷すゞ子〔長谷川〕	私立愛知淑徳高女 (国, 歴)	なし	なし
	T 6.3 博家 糸永キヨ〔手島〕	京都市第三高等小学校*	京都府立第二高女 (音, 博)	なし

備考：『中等教育諸学校職員録』大正10年版，11年版，15年版より作成。

→印は継続を示す。\*印は奈良女子高等師範学校（1924，1926）に基づき執筆者が補足したもの。

彼らを押しつけてまで音楽を担当することはせずに自身の専門である理数科教育ひと筋であった。2回生の田代愛は清水谷高女で国語と音楽を担当したが、同校での肩書は「国語教師」であった（大阪府立清水谷高等学校 2001：639）。

選修音楽科の卒業生にとって主務は本科での専攻科目を教えることであり、音楽はプラスアルファの免許科目と言えるのではないか。田中ムメノは回想記の中で選修科を「趣味の講座」（奈良女子大学 1989：287）と示唆に富む言い方をしている。教員養成を目的とする選修科が「趣味の講座」とはいかなることか。これに関して参考になるのが選修裁縫科3回生のM子（仮名）の次のような回想である。

「むずかしい理化学の奥義を調べて居るその人が、裁縫又は図画音楽園芸などの一つに趣味をもち且は多少の心得があるという所に、女子教育にあずかる女子の先生の生命があるのである。従って選修の価値たるや当にここにあった。選修科は半ば人格をつくる為めのものであった。」（奈良女子大学 1989：418）。

奈良女高師では女性教員たるもの本科で専門的知識を習得するだけでは不十分で、趣味の一つももち一通りの技能を身につけてこそ本物だと考えていたようである。本科が専門教育なら選修科は教養教育であり、したがって本科4部に開かれていたのである。選修科の裁縫、図画、音楽、園芸、習字は実技科目であり、選修5科は奈良女高師ならではの教員免許付きの習い事であった。歌や楽器の個人レッスン中心の選修音楽科は女子の習い事の最たるものであったろう。選修音楽科は音楽教員の増産が第一の目的ではなかったのである。生徒にとっても選修音楽科は演奏会に向けて研鑽を積む場であり、音楽科教員免許は敢えて言うなら習い事の修了証ではなかったか。

## 5. 選修音楽科から科外稽古へ

大正3年（1914）の学科改正後、奈良女高師の音楽教育も変化した。大正3年には予科の廃止により必修音楽は1、2年が週2時間、3年と4年1学期が週1時間、4年2学期が週2時間となった（表1-③）。選修音楽は廃止されたが、それでも必修音楽は4年間確保されていた。ところが大正5年（1916）には、開校以来の学習困難者に対する

音楽免除の規程を削除した上で必修音楽を1年のみとし、週2時間にカットした（表1-④）。教育内容も唱歌のみとなり、もともと随意であった楽器練習を削除した。奈良女高師の音楽教育は縮小される一方であったが、音楽好きの生徒には課外で音楽を学ぶ場が残されていた。すなわち大正3年改正の「奈良女子高等師範学校規則」には「選修科目ヲ設ケ生徒ノ希望ニ随ヒテ之ヲ選修セシメ又科外講話科外稽古ヲ行ヒ生徒ノ全部又ハ一部ヲシテ聴講ハ学習セシムルコトアルベシ」（第4條）とあり、「科外稽古」の一つに音楽があった。科外音楽（声楽と器楽の2科）は「普通科外」とより高度な「特別科外」のレベル別に分けられており（平井1995：217）、他の科目も同様であったと思われる。特別科外について山添さと（旧姓蘆田。大正6年入学、大正10年文科卒）は次のように回想している。

「特別科外で声楽・器楽・ダンス・薙刀・園芸・書道等があり希望者は四年間同じものを続けてとる事も出来たので相当深くその道の勉強が出来た。（中略）現在盛んに行われている自由なクラブ活動とか同好会等に比べてもっと正規の授業に近い性格のもので且非常に生徒には魅力的であった」（奈良女子大学 1989：290-291）。

ちなみに山添は特別科外で声楽と薙刀を4年間学んだ。山添によれば、同期で家事科の田中喜美代も特別科外の声楽を熱心に学び有志によるコーラス部にも参加し、卒業後に勤務した神戸高女では「専門の家事の授業よりむしろ音楽の授業の方が主になった程だった」（奈良女子大学 1989：291）という。<sup>(11)</sup>

特別科外の「声楽・器楽・ダンス・薙刀・園芸・書道等」はかつての選修5科の延長上にある習い事と言ってよい。選修科は教員養成を目的とするが「趣味の講座」と言われるような教養教育的な内容であったために、選修科廃止後も「科外稽古」と形を変えて存続することができたと筆者は考える。教員免許に直結しない科外稽古ならば生徒は能力や興味に合わせて深くも浅くも学ぶことができ、実際、特別科外の声楽には田中喜美代のように「趣味」の域を超えて高等女学校で教えられるほどの実力者もいた。

しかし大正10年（1921）の改正で、音楽は随意科目に格下げになってしまった。随意音楽は1、2、3年と4年（2学期まで）が週1時間であり（表1-⑤）、奈良女高師の音楽教育は形ばかりとなった。

表 5. 奈良女子高等師範学校校友会主催音楽会の演奏曲（大正14年12月5日）

2年家事科 土岐八重子 (P)	[メンデルスゾーン]: 春の歌 [op. 62-5]
4年選科 (家事科) 村田愛子 (V)	[グノー]: 夜の調べ [Sérénade]
3年選科 (家事科) 棚瀬隆子 (P)	[ショパン]: 譚歌 [バラードを指すか]
4年理科 新沼つねを子 (V)	[ドニゼッティ]: 舟人 [Il barcaiolo]
4年選科 (地理) 槇山春子 (P)	[ショパン]: 諧謔 [スケルツォを指すか]
4年理科 駒しゅん子 (V)	[シューベルトまたはグノー]: アヴェマリア
4年文科 森野美智子 (P)	[ショパン?]: 幻想曲
4年選科 (家事科) 山本周子 (V)	トマ: 「ミニヨン」より「君よ知るや南の国」

備考: 平井 (1995) より作成。[ ] 内は執筆者による補足。選科は本科の科目の一部を選択して学ぶ課程。

同時に大正3年の改正規則第4条が削除され、科外稽古も存在する根拠を失った。選修音楽科は音楽教員養成科ではあるが習い事の性格も合わせ持っていたので、音楽専門教育は大正3年には科外稽古という形で存続できたのであるが、大正10年になると科外稽古という教員養成から外れた習い事であるために打ち切られたのではないか。もっとも生徒の自主的な音楽活動は大正10年後も続いており、例えば大正14年（1925）12月5日の校友会主催音楽会を見るとピアノではショパンの作品（バラード、スケルツォ、幻想曲）で出演する生徒がいて（表5）、選修音楽科時代の音楽会の演奏曲（表3参照）よりもレベルアップしている。しかし奈良女高師が教養を目的とした音楽専門教育を実施することは二度となかった。

#### 注.

- (1) 特に女性体操教員が音楽を兼任するケースは全国で見られた（掛水2014）。
- (2) 奈良女高師では明治43年4月25日に東京音楽学校教授神戸絢と外国人教師ハンカ・ペッツォルド Hanka Petzold が学事視察のために来校し、同日校友会主催で両名による音楽会を開く。翌44年3月27日から4月1日まではペッツォルドによる臨時講習を行い、最終日に音楽会を開く。同年7月9日には神戸絢と頼母木こまの2教授を招聘し、校友会主催の音楽会を開く。同年10月24日には修学旅行で奈良を訪れた東京音楽学校女子生徒たちを招いて音楽会を開く。翌45年6月28日にはペッツォルドのピアノと独唱の音楽会を開く（奈良女子高等師範学校 1910, 1911, 1912）。
- (3) 一例をあげると、表3-③の演奏会での独唱曲

「覚醒」（原曲：ヘンデル作曲「オンブラ・マイ・フ（ラルゴ）Ombra mai fu (Largo)」, 訳詞：内藤水笛）は小松玉巖編『名曲新集』（明治42年、松本楽器刊）に収録されている。

- (4) 島崎赤太郎「オルガン教本」全2巻は明治32年（1899）刊。「小学唱歌集四重音」は「小学唱歌集」のメロディに四声体の和音をつけたもので東京音楽学校編「小学唱歌集用オルガンピアノ楽譜」明治32年（1899）刊と推測される。「ベンダー」全3巻は未確認。「レーメンズ」（レメンズ）Lemmens, Nicolas Jacque (1823-1881) はベルギーのオルガン奏者・作曲家で彼が著した教則本を指す。なお、表3-⑤の演奏会ではレメンズ作曲「ファンファーレ」が演奏されている。
- (5) 大正2年数物化学部卒業であるが選修科を修了していない。
- (6) 明治44年4月22、23日学友会春季演奏会、同年5月3日に学友会女子部演奏旅行団を迎えた桐生高女において小泉千賀子が演奏した（東京芸術大学 1990: 311, 315）。
- (7) 5月3日の桐生高女における学友会女子部演奏会において吉田繡子が演奏した（東京芸術大学 1990: 315）。
- (8) 大正7年文科1回生として卒業。音楽科教員免許は取得していない。
- (9) 同時期の東京音楽学校生徒の演奏会レパートリーが参考になる。大正2年12月20日の学友会第7回土曜演奏会では森川達子（アルト）が「歌劇『ゼミラミス』中の抒情調」、長坂好子と永井いくが「歌劇『フィガロの結婚』中の二重唱」で出演した。「バルビーア」については、明治44年5月3日の桐生高女における学友会女子部演奏会において青山浪子が「バルビエル中のカヴァティナ」

を歌い、同4年9月25日の学友会第14回土曜演奏会では武岡鶴代（ソプラノ）が「歌劇『シキリアの床屋』中のロジイナの音楽調（ウナフォーチェポーコファ）」を歌った（東京芸術大学1990：315, 385, 418）。

(10)『中等教育諸学校職員録』によれば、鹿児島県立第一高女の音楽教員は大正10年度と11年度は北村泰三（明治41年乙種師範科卒）、15年度は近森出来治（明治30年師範部卒）である。

(11)『中等教育諸学校職員録』によれば、田中喜美代の担当科目は大正10年度は裁縫と音楽と教育、11年度は音楽と作法、15年度は教育と音楽であり、継続的に音楽を指導していた。

時教員養成所一覧』大正11, 13～15年度  
奈良女子大学六十年史刊行委員会※（1970）『奈良女子大学六十年史』奈良：奈良女子大学  
奈良女子大学八十年史刊行委員会※（1989）『奈良女子大学八十年史』奈良：奈良女子大学  
平井啓（1995）『奈良県音楽近代史－音楽教育を中心に－』奈良：平井啓  
文部省普通学務局第1課（1915）『教員免許台帳（師範学校中学校高等女学校・免許）7の1・大正4年度』国立公文書館蔵  
文部省普通学務局学務課（1915）『教員免許台帳（師範学校中学校高等女学校・免許）7の2・大正13年度』国立公文書館蔵

#### 参考文献.（※印の文献は本文中には校名のみ略記）

（2017年5月22日受付）

大阪府立清水谷高等学校100周年記念事業実行委員会記念誌委員会※（2001）『清水谷百年史』大阪：大阪府立清水谷高等学校

（2017年7月13日受理）

「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会※（1984）『お茶の水女子大学百年史』東京：「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会

掛水通子（2014）「大正後期における私立東京女子体操音楽学校卒業中学校体操科教員の実態について－『中等教育諸学校職員録』を手懸かりに－」東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要第49号, 27－45頁

『神戸女学校の125年』編集委員会※（2000）『神戸女学校の125年』西宮：神戸女学院

坂本麻実子（2006）『明治中等音楽教員の研究－『田舎教師』とその時代－』東京：風間書房

東京芸術大学百年史編集委員会※（1990）『東京芸術大学百年史 演奏会篇』第1巻 東京：音楽之友社

『同志社女子大学125年』編集委員会※（2000）『同志社女子大学125年』京田辺：同志社女子大学

中等教科書協会（1921, 1922, 1926）『中等教育諸学校職員録』大正10, 11, 15年度版（国立国会図書館デジタル化資料）

奈良女子高等師範学校（1910～1921）『奈良女子高等師範学校一覧』明治43年度～大正10年度

奈良女子高等師範学校（1914）『奈良女子高等師範学校概覧』

奈良女子高等師範学校, 第三臨時教員養成所（1922, 1924～1926）『奈良女子高等師範学校, 第三臨